
アイドル探偵 4 「波乱の京都旅行」後編

田中タロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アイドル探偵 4 「波乱の京都旅行」後編

【Nコード】

N7646M

【作者名】

田中タロウ

【あらすじ】

アイドル探偵第4弾！慰安旅行のつもりが疲労旅行になってしまった寿々菜たち一行。しかし、最後の最後にますます疲れる事件が待っていた。なんと寿々菜たちが乗った新幹線が何者かに占拠されてしまったのだ。寿々菜たちの運命は？そして犯人達の目的は・・？

第1話 返品

「これ、返品する」

そう言われれば、たいていの場合、言われた方はいい顔をしない。しかし、今回はかりはその限りではない。

返品された側の面々は、笑顔で返品されてきたモノを受け取った。

「おかえりなさい！」

「待ってましたよ！」

「まあ、無事でよかったな」

すると「返品されてきたモノ」は不敵な笑みを浮かべて「まーな」と言った・・・

事の起こりは、1時間と少し前の寿々菜^{すずな}の寝坊だった。

「スウ！起きてるか！？」

マネージャーの山崎が、寿々菜の部屋の扉をドンドンと叩いた。と言っても、ここは寿々菜の家ではない。

京都の老舗旅館の一室である。

誰もが知るトップアイドル、KAZUこと岩城和彦^{いわきかずひこ} 21歳と、

誰も知らない駆け出しアイドル、スウこと白木寿々菜^{しき} 16歳と、
寿々菜ではなく和彦のマネージャー、山崎 30歳と、

警視庁捜査一課の刑事、武上 24歳、

というよく分からない面子で、何故京都へやってきたのかは、
「波乱の京都旅行 前編」を読んで頂くとして、割愛しよう。

ついでにこの4人の複雑極まりない関係も割愛・・・したいところ
だが、

今後の進行に支障をきたすかもしれないので、これは説明しておこ
う。

寿々菜と山崎（ちなみに男）は、和彦を巡りライバル同士。

若き刑事の武上は寿々菜に惚れていて、寿々菜が好きな和彦とは犬
猿の仲。

早い話が四角関係である。

え？全然複雑じゃない？

まあ、それはともかく。

こんな4人での京都旅行なんぞ、無事に終わるはずが無い。

そして案の定、4人は京都でとんでもない、というか、くだらない
事件に巻き込まれてしまった。

しかし一度巻き込まれてしまえば、「もうこんなことも無いだろう」
と、

憑き物が落ちたように4人はさっぱりした気持ちで残りの旅行を楽
しめた。

が。

そうは問屋が卸さない。

最後の最後で、4人は再び事件に巻き込まれることになるのだが、そんなことは露知らず。

低血圧の寿々菜は、外から叩かれる扉の音を布団の中で夢現に聞いていた。

「どーした、山崎。寿々菜の奴、まだ起きないのか？」

「あ、和彦さん。いえ、起きてはいるみたいなんですけどね・・・全く、あんな低血圧でよくアイドルなんてやってられるな！」

仕事がないから、やってられるのだろっ。

山崎が頭を抱えた。

「ああ！新幹線が出てしまう！」

「仕方ねーなあ。おい、寿々菜！聞こえるか!？」

「・・・ふえ」

聞こえているのか聞こえていないのか、よく分からない返事が返って来る。

「寿々菜！後10秒で出てきたら、おはようのキスしてやるよ。い

ーち、にーい、さー」

「おはようございます!!!」

人間、やればできるもんだ。

残念ながら、武上と山崎によって、和彦の約束は全力で阻止されてしまったが、

和彦の機転により、4人はなんとか京都駅に辿り着いた。

「・・・辿り着いただけだね」

山崎が、小さくなっている寿々菜を睨む。

「間に合わなかったじゃないか！どうするんだ、スウ！」

「すみません・・・」

「まあ、まあ。いいじゃないですか、山崎さん」

寿々菜に甘い武上が、山崎をたしなめる。

「寿々菜さんも和彦も山崎さんも、今日は仕事はないんでしょ？
新幹線の1本や2本遅れても、問題ないじゃないですか」

「まあ、いいんですけどね」

山崎が新幹線のチケットを4枚取り出した。

4人とも稼ぎのある身なので、新幹線代も宿泊費も、
自分の分は自分で出している。

ただ、全般の管理はやはり職業柄、山崎が担当していた。

「グリーン車分のお金が無駄になるだけですから」

「・・・」

そう。

武上・山崎、そして悲しいことに寿々菜もグリーン車なんてセレブ
な車両に乗る必要は全くないが、

「誰もが知るトップアイドル」和彦は、そうはいかない。

グリーン車に乗ったところで顔を隠せるわけではないにしても、
グリーン車に乗る人間達というのは、それなりに立場やらプライド

やらがあるもので、
例え芸能人を見ても大騒ぎしないものである。

だから和彦は仕事でもプライベートでも、新幹線はグリーン車を利用している。

特に、以前「ま、いつか」と自由席の車両に乗り、女子高生達に見つかって大騒ぎされて以来、すっかり懲りてしまった。

もちろん今回の旅行も例外ではない。

「和彦さんと僕は、次の新幹線のグリーン車のチケットを取りますけど、

武上さんとスウはどうします？」

「・・・」

出発前、寿々菜が「和彦さんと一緒にいいです！」と言うので、行きも帰りも、寿々菜と武上は和彦たちと同じグリーン車のチケットを取った。

既にそれを無駄にした上に、また新たにグリーン車のチケットを取るとなると・・・

武上は頭の中で収支のバランスを計算した。

しかしそんな計算も、寿々菜の「私ももう一度グリーン車のチケットを取ります！」という一言で、

ご破算となった。

寿々菜とて、少々の稼ぎがあると言っても女子高生の身。

苦しいことに変わりはないが、和彦と一緒にいられる時間はプライ

ストレスである。

こんな愉快的な仲間達を乗せた東京行きの新幹線が京都駅を出発したのは、

午前11時10分のことだった。

第2話 ハイジャック？

休暇中でも、刑事は刑事。

例えば好きな女が横に座っていても、怪しい人物がいれば気になってしまう。

あの男。

何をあんなに怯えているんだろう？

武上は、通路を挟んで斜め後ろに座っている男を観察した。

「うだつが上がらない」という文字がスーツを着たような、40前後の痩せた男。

シルバーのアタッシュケースを後生大事に抱えている。

京都へ行く時に生まれて初めてグリーン車に乗った武上が言つのもなんだが、

およそグリーン車に似つかわしくない感じた。

男は、武上たちと同じく京都駅からこの新幹線に乗ってきた。

駅のホームでも彼は、柱を背にアタッシュケースを抱きしめていて、思わず、誰かがそれを狙っているんだろうか、と武上は思ったくらいだ。

どこまで乗るのかは分からないが、京都駅を出てまだ15分しか経っていないのに男は既に汗だくである。

いっそ、「警察です。よかつたら護衛しましょうか？」と言ってや

りたい。

だが・・・

あのアタッシュケースの中身はなんなんだろう？

あれほど大事に抱えているんだから、よほどの大金か、それとも・

警察に見られるとマズイような物か。

武上は悩んだ。

とにかく男は、声をかけようものなら、飛んで逃げてしまいそうなくらいの緊張振りだ。

それに武上も休暇中。

京都では、余計なことに首を突っ込んで少々疲れもした。

よし。無視しよう。

その結論に達するのに、そう時間は必要なかった。

だが、武上のその選択は大正解だった。

アタッシュケース男の今の気分はまさに「四面楚歌」。

刑事だろうとアイドルだろうと、自分以外全ての人間が敵である。

全ての人間？

いや、そうじゃない。

俺にだって味方はいる。

男は、アタッシュケースを抱き直し、

昨日部長に言われたことを思い出そうとした。

そう、部長は俺にこう言っただ。

この設計図を東京のR社の社長に渡して来い、
間違いない渡すことができれば、お前に課長のポストを用意してやる、と。

このまま定年まで平社員で終わると思っていたのに！
ここに来て、逆転満塁ホームランだ！！

男の名前は奥山という。

奥山が勤めているB社は、精密機械の設計を専門に行っている小さな会社だ。

それが、東京にある大手・R社から何やら難しい設計を依頼されたことは、

奥山も噂で聞いていた。

奥山は胸が躍った。

後輩達がどんどん出世する中、奥山はこの歳になるまで何の肩書きもなく過ごしてきた。

会社でも家でも肩身の狭い思いをしてきた。

それがどうだ！一気に課長だぞ！管理職だぞ！！
しかも、ただこの設計図を東京まで運ぶだけでいいなんて！

正直、奥山もこんな上手い話が本当にあるのだろうか、と疑問に思わないでもない。

それに奥山は入社以来20年間ずっと経理畑で働いており、技術的なことはさっぱりだ。

R社の社長に無事この設計図を渡せたとしても、何か質問されたら全く答えられない。

さすがに奥山も不安になり、部長にそう言ったのだが・・・

「質問には答えなくていい。というか、この設計図は素晴らしい出来だから、

質問なんて出るはずもない。お前はただ、これを手で運んで渡せばいいだけだ」

「はあ」

「簡単だ、とか思っなよ？この設計図は極秘の物で、コピーはもちろん、

データもない。なくしたら最後、もう二度と作り直すことはできない」

「え・・・そうなんですか？」

「そうだ。明日、必ず東京でR社の社長に渡せ！うちの社長も先に東京に行っているから、

R社の社長と会う時は同席する。わかったな？」

「は、はい」

「我が社の社運がかかってる！頼んだぞ！」

「はい！」

いまどき、データのバックアップも無いなんてこと、あるんだろうか？

いや、これは極秘なんだ。

そういうこともあるんだろう。

とにかく俺は、これを運べばいいんだ！

奥山は自分を納得させ、今こうして新幹線に乗って・・・

それも、わざわざ自腹でグリーン車のチケットを購入して、極秘の設計図を運んでいるのである。

確かに簡単な仕事ではあるが、

無事果たすことができれば課長、ということは、逆に言えば、果たすことができればクビも覚悟しなければならない。

何枚もの設計図が入ったアタッシュケースを奥山が一秒たりとも離せないのも、

仕方の無いことかもしれない。

もちろん、そんな奥山の事情など全く知らない和彦たち4人は、座席を反転させて向かい合わせに座り、早くも昼ご飯である駅弁選びに余念がない。

「和彦さんはどれにしますか？」

寿々菜がガイドブックを和彦に差し出す。

「コレに載ってる弁当が、車内で売られてるのか？」

「はい！これなんか美味しそうですね！」

「そーだな」

「あ、武上さんはどうします？」

「んー、そうですね」

その時、突然車内にアナウンスが流れた。

和彦は一瞬、名古屋に停車することを伝えるアナウンスかと思ったが、

いくらなんでも早すぎる。

それに・・・なんだか声が上ずっている。

「乗客の皆様にご連絡致します・・・当列車は・・・ハイジャックされました」

第3話 忍び寄る危険

車内がざわめく。

「なんの冗談だ？」

「新幹線なんてハイジャックしてどうするんだよ」

「てゆうーか、新幹線の場合は『ハイジャック』って言わないだろ」

「じゃあ、電車ジャック？」

「電波ジャックみたいだな」

「せめてトレインジャック、とか」

「新幹線は英語でもShinkansenだから、新幹線ジャックじゃねーの？」

緊迫感に欠ける空気が流れた。

そりゃそうだろう。

まさか本当に新幹線がジャックされたとは誰も思わない。
電車なんぞ、どこの誰が何のためにジャックするのか。

「ドッキリですかね？」

寿々菜が首をひねる。

「かもな。もしかしたら俺がこの新幹線に乗ってるのを知って、
どっかの局の奴が仕掛けたのかもしれない」

有名芸能人の和彦が言うのなら、確かにそうかもしれない、と思える。

それでも武上は少し腰を浮かせて車両内を見渡した。

グリーン車に乗るような人種だからなのか、一瞬ざわめきが広がったものの、乗客はすでに落ち着き払って何事も無かったような様子だ。

さっきのアタッシユケース男も、鞆を握る手に力を入れ直してはい
るものの、
特に変わった様子もない。

新幹線をジャックするなんて、そんな馬鹿なこと・・・

しかし万が一、ということもある。

武上は新幹線内を歩いてみることにした。

その頃。

新幹線の先頭車両だけは他の車両とは違い、それこそハイジャックされた飛行機のコックピット並の緊張感に包まれていた。

何と言っても、黒づくめの覆面男が3人、運転手に拳銃を向けているのだから。

「よし。車内アナウンスは終わったな？」
「は、い・・・」

運転手は手に汗を握った。

今ここには、運転手1人と黒ずくめの男達しかいない。
他の人間は入って来られないよう、男達が鍵をかけてしまった。

なんてことだ！

この仕事を15年以上やってるが、こんなことは初めてだ！
いや、新幹線を占拠するなんて聞いたことがない！
それがよりによって、俺の運転するこの新幹線で起きるなんて・・・

運転手はそう叫びたかったが、命は惜しい。

それに乗客を危険にさらすわけにはいかない。

「よし、次は東京駅に連絡を入れろ」

ボス格らしい中肉中背の男が、運転手に銃口を向けたまま言った。

「え？東京駅に、ですか」

「そうだ。2時間以内に東京駅に1億円と、逃走用の車を用意する
ように言え」

1億！？

だが、逆らうことはできない。

運転手は言われたとおり、東京駅にいる乗員に、
新幹線が占拠されたことと、男達の要求を伝えた。

東京駅の乗員は半信半疑だったが、
運転手の真剣な声に納得したのか、
「上役に伝えます」と言ってくれた。

「よし、通話を切れ」

「はい」

「いいか、今後外部との連絡は一切取るな。俺がここで見張ってる。
妙な真似してみる。乗客を1人ずつ殺すからな」

「は、はい！言われた通りにします！だから・・・！」

「そうそう。あんたは俺たちの指示に従ってりゃいいんだよ」

ボス格の男がニヤリと笑うと、

その後ろにいたあとの2人の男・・・ノツポの細男とチビのデブ男
という、冗談みたいな2人だ・・・

は、一仕事終わったと言わんばかりに背伸びをした。

「よし、これで到着するまでやることねーな！」

ノツポがそう言うのとチビがうんうんと頷く。

「アニキ！暇だから、乗客の財布でもあさりに行きましょうや！」

「ああ、そうすつか！」

不必要にデカイ声である、というか、わざとらしい。

「んじゃ、いつてきます！」

「わかった。早く戻って来いよ」

ボスがそう返事すると、ノッポとチビの2人は運転室から出て行った。

「さあ、のんびり列車の旅、と、行こうじゃないか」

ボスの言葉に、運転手は凍りついた。

おかしい。

武上はそう思いながら、自分の席へ戻った。

どの車両にも犯人らしき人物はいなかった。

新幹線の車両数は多いから、どこかで入れ違った可能性も無くはない。

だが、所詮通路は一本だ。

たまたま犯人がトイレにでも入っていない限り、見過ごすことはないだろう。

それとも、敢えて犯人とわかりにくい格好をしていたのだろうか？

それではジャックの意味がない気もするが・・・

武上はもう、この電車ジャックがただのビックリやイタズラだとは思っていないかった。

新幹線は停車予定だった名古屋を止まることなく通過したのだ。イタズラにしては度が過ぎている。

実際、名古屋で下車するつもりだった客が既に騒ぎ始めていた。

「おかえりなさい、武上さん」

寿々菜の笑顔に、武上は少しホッとして、腰を下ろした。

「どうでした？」

「全部の車両を見ましたけど、怪しい人物はいませんでしたね。

あ、でも、後一箇所見てないところがあります」

「え？どこですか？」

「運転手のところです」

実は、

本当にこれが電車ジャックなら、犯人はそこにいる可能性が一番高い、と、

武上は思っていた。

当然である。

ハンドルを握っているのは運転手なのだから、最低でも1人は犯人がそこにいるはずだ。

それでいて、武上がそこに行かないのには訳がある。

まず、いくらこれが本当の電車ジャックかどうか確かめたいとは言え、

一般の客がノコノコと、犯人がいるかもしれない運転手のところへ行くことは普通ないだろう。

そんなことをすれば、犯人に武上が刑事だということを感づかれるかもしれない。

ジャックされた電車の中に刑事がいて、しかも犯人がそれに気付いていないというのは、

不幸中の大きな幸いである。

そのアドバンテージを失いたくない。

それともう1つ。

武上は丸腰だということだ。

犯人は何か凶器を持っているに違いない。

運転室へ入って行って、いきなり刺される・・・なんてこともあり得る。

ここはやはり慎重に行くべきだ。

武上は、今後の対策を考える意味でも、運転室へ行く前に自分の席へ戻ってきたのだ。

そこには、推理力に長ける和彦への期待も少なからずある。

武上が、和彦に向かって口を開こうとしたその時、車両前方の自動ドアが静かに開いた。

第4話 漫才コンビ登場

自動ドアは確かに静かに開いた。
が、入ってきた2人の黒づくめの男は、お世辞にも静かとは言いがたい。

「おお！ここがグリーン車ってやつか！」

「アニキ！俺、生まれて初めて入りました！」

「俺もだ！うわ、座席広いな！」

和彦は通路に少し顔を出し、2人の男を見た。

言うまでも無く、さつき運転室にいたノッポとチビである。

どうやらノッポが「アニキ」で、チビが子分のようだ。

わかりやすい。

「なんだありや？新しい漫才コンビか？」

「和彦！静かにしろ！・・・2人の手を見る」

「え？」

武上に言われて、和彦は目を凝らした。

黒づくめの2人の手には・・・拳銃らしき物が光っている。

「じゃあ、あれが犯人か？」

「だろうな」

「あんなサンタクロース漫才コンビが？」

「・・・」

和彦がそう言ったのも無理はない。

ノッポとチビの2人は、サンタクロース顔負けの白い大きな袋を担

いでいたのだ。

ご丁寧に覆面なんぞ被っているが、それが逆に面白い。

「新幹線なんかジャックする、ってだけでもそーとー間抜けなのに、あんな格好見せられちゃ、一気にテンション下がるな」

「なんのテンションだ。そんな余計なもの上げずに、大人しくしてろ」

武上が小声で和彦に怒っている間に、2人の黒づくめは、車両内に響き渡る大きな声で言った。

「おい！聞け！この新幹線は俺たちが占拠した！命が惜しかったら、この袋の中に、

現金や腕時計なんかを全部入れろ！わかったな！！」

2人はそう言うや否や、早速前の席の乗客から金を巻き上げ始める。さすがに乗客たちからは、先ほどの悠々とした雰囲気は消えた。

山崎が、向かいに座る武上に小声で話しかけた。

「どうしますか？」

「取り合えずここは言う通りにしましょう。あいつらが別の車両に行ってから、警察に連絡を取ります」

「でも、犯人があのだの2人だけとは限りませんよ？他にもいるかも・・」

「ええ。少なくとも運転手についている奴があと1人いるでしょう。合わせて3人以上はいることになる」

山崎が神妙な面持ちで頷く。

武上も緊張からか、黒づくめ達を鋭い視線で睨んでいる。

そして寿々菜は青い顔で隣の武上に少し近づいた。

和彦は・・・

はあ。これじゃさすがに駄弁は食えないなあ。

と、ため息をついた。

「よし、次はお前らだ。さっさと袋に金を入れろ！」

ついに黒づくめ達が、向かい合わせに座っている和彦たち4人のところへやってきた。

武上は、男達を観察したくてわざとゆっくり財布から金を取り出した。

山崎もそれに従う。

寿々菜は、ゆっくり出すほど金を持っておらず、5千円札を一枚、袋の中へ入れた。

が、それより先に、和彦がバサバサと大量の1万円札を袋に投げ入れた。

「おおお！さすがにグリーン車に乗ってる奴は金持ちだな！」
「すげえ。お前、今、いくら入れたんだ？」

「さあ。あるだけ入れた」
「うわ・・・気前いいな」

全部入れると言ったのはお前達だろ。

和彦が冷ややかな視線を黒づくめ達に送る。
そして・・・2人はソレに気付いた。

「あれ、アニキ！こいつ、KAZUですよ！」
「KAZU？あの『御園探偵』^{みそのたんでい}ってドラマの主人公やってる奴か？」
「そうですよ！うわ、さすがグリーン車！」

何をそこまでグリーン車を崇めているのかわからないが、
チビはしきりに感動した。

「な！お前、KAZUだろ！？」
「ああ」
「やっぱり！！！」

黒づくめ達の大きな声に、他の乗客たちも振り向き、小さな歓声が
起こる。

だがこの状況では、KAZUがいても大して騒げない。

「へえ！芸能人って本当にいるんだな！」

ノッポが関心したように言った。
当たり前である。

「よし。なあ、お前。サインしろ」

「は？」

「俺の彼女が、あんたのファンなんだよ」

「ええ！？アニキ、彼女いるんすか！？」

「おう」

「前、いないって言ってたじゃないっすか！」

「1週間前にできたんだよ」

「えええゝいいなあゝ。俺も彼女、ほしい・・・そうだ！ついでに写真も撮つといたらどうです！？」

「ここですか？そりやまずいだろ」

「この新幹線の中だつてわかんないように撮つたらいいっすよ！」

「そつか、なるほどな」

「決まりっすね！よし、お前！俺達について来い！」

チビが和彦の腕を引っ張った。

和彦が少し顔を歪める。

が。

「おい、ちよつと待て。この車両で金目のモン集めてからにしようぜ」

ノツポがそう言つと、チビがハツとしたように和彦の腕を離れた。

「そつか！そうっすね、アニキ！仕事はちゃんとやらないと！おい、お前、ちよつと待ってる！」

「へえへえ」

和彦は呆れたように座席に座り直し、腕を組んだ。

第5話 第2ラウンド

第2ラウンドのゴングはすぐに鳴った。

「おい、その鞆も袋の中に入れろ」

「ダメです！」

アタツシユケース男・奥山は、アタツシユケースを必死に抱きしめた。

だがノツポはそれを強引に取り上げようと、引っ張る。

「やめてください！これは、ただの書類です！」

「嘘つけ。そーゆー鞆には金が詰まってるって決まってるんだよ」

ドラマの見すぎだ。

和彦が心の中で呟いた。

だが、和彦の考えていることを察した武上は、

「お前がゆーな」と目で突っ込む。

「本当にただの書類です！ほら！」

奥山はノツポにアタツシユケースを開いて見せた。

なるほど。確かに金ではなく、何やら書類が入っている。

ずっと奥山を気にしていた武上は、その書類をチラッと覗き見た。

何かの設計図みたいだな。

あれほど大事にしているということは、よほど大切な設計図なんだろう。

それにしても・・・

武上はため息をついた。

適当に「いいですけど、ただの書類ですよ」とでも言っ、あっさり渡そうとすれば、あのノツポも「邪魔になるからいらない」と受け取らないだろうに。固執するから、逆に相手は欲しくなるんだ。

案の定、ノツポは中身を見て一瞬怯んだが、一向に引き下らない。

「お前に選択の権利はないんだよ。ほら、入れろ！」

「い、いやです！」

「んじゃ、死ぬか？」

ノツポは奥山に拳銃を突きつけた。

先ほど武上が見た限りでは、本物の拳銃のようだ。

「い、いえ・・・」

「じゃあ、さっさと入れろ」

さすがに奥山もここで撃ち殺されるのは嫌なのか、

渋々アタツシケースをノツポの手の中の白い袋に入れた。

「よしよし。最初っから素直にそーすりゃいいんだよ」

ノツポは満足気に、次の客のところへ行った。

だが、奥山が憎しみを湛えた目でノツポの後姿をジッと睨んでいたことに、

武上は気付いていた・・・。

「おっしや、終了！行くぞ！」

チビが再び和彦の腕を掴んだ。

「いてーな・・・おい、まだ向こうの車両の客から、金巻き上げてねーだろ」

どーゆーアドバイスだ。

「グリーン車はここで最後だからな！じゅうぶんだ！どーせ一般車両の奴らなんか金持っつてねーだろ」

一人当たり平均で見ればそうかもしれないが、

一般車両には乗客も多い。

合計金額で見れば、断然一般車両の客から金を取った方が得だろうに、

チビはとにかく「グリーン車は金持ち!」と思い込んでいるようだ。

和彦も、さすがにそれ以上は面倒臭くて口を噤んだ。

「和彦さん!」

寿々菜が、立ち上がった和彦を涙目で見る。

「あの人。死に行く訳じゃねーんだぞ」

「でも・・・!危ないです!」

「そうですよ!行っちゃダメです!」

山崎も、必死で和彦を止める。

だが、やはり拳銃の前では無駄な抵抗というものだ。

「大丈夫だって。こいつらも、わざわざ人殺しなんて面倒なこと、しねーだろ。なあ?」

和彦が振り向くと、ノッポとチビが頷いた。

「ああ。KAZUなんか殺したら、日本中の女を敵に回すことになるからな。」

でも、妙な真似したら、ちょっとくらい痛い目にあうぞ?わかったな」

「へえへえ。んじゃ、行ってくるわ」

「和彦さあゝん」

寿々菜と山崎は、指をくわえて、和彦を見送ったのだが・・・

あれ？
なんだろう、これ・・・

「うーん」

「どうしました、寿々菜さん？」

武上が、隣で唸る寿々菜に訊ねる。

「あの、何かちよつと・・・」

「違和感、ですか！？」

武上は勢い込んだ。

和彦は、ドラマ「御園探偵」の探偵役で鍛えたお陰か、武上も一目置く推理力を持っている。

そして、寿々菜。

物事を理論的に考えるのは苦手だが、優れた直感の持ち主である。

和彦も武上も、寿々菜の直感には幾度と無く助けられている。

（迷惑をかけられることもあるが）

その寿々菜が、またしても何かに違和感を感じたらしい。

だが、残念ながら、いつもその違和感の正体をつきとめてくれる和彦は、今いない。

いや、和彦なんか頼ってたまるか！
俺だって！

武上は寿々菜にゆっくり話しかけた。

「何を見て、違和感を感じましたか？」

「ええつと・・・さっきの黒づくめの2人、です」

そりゃ、違和感ありまくりである。

「あの人たち、何しにきたんでしょうか？」

「え？」

寿々菜は首を傾げた。

「それは、グリーン車の乗客の持ち金を集めに来たんだろう」

山崎が答える。

「そうなんですけど。そのために、この新幹線をジャックしたんでしょうか？」

「なんか、割に合わないというか・・・」

「なるほど。確かにそうですね」

武上は頷いた。

仮に、グリーン車だけではなく一般車両の客からも金を巻き上げたとしても、大した稼ぎにはならない。

それならコンビ二強盗の方がよっぽどお手軽でいい。

つまり、車内での持ち金集めは、本来の目的じゃないってことか。

なら、本来の目的はやはり・・・

武上は、ズボンのポケットから携帯を取り出した。

第6話 説教

「せーんろは続くーよー、どーこーまーでもー♪って、んな訳ねーだろ！」

「・・・」

「お前ら、アホか。新幹線なんぞジャックして、どこに行くつもりだ」

「・・・」

「せいぜい、東京駅が関の山だろ。それも着いた瞬間、警官に囲まれて逮捕されるぞ」

「・・・」

「こんなことする暇あったら、銀行強盗でもしてろ。よっぽど儲かるぞ。」

「つつか、ハローワークに行け」

「・・・」

ここは、黒づくめ達によってジャックされている新幹線の食堂車。中にいた乗客・乗員はノッポが他の車両へ追いやったので、今、食堂車にはノッポとチビ、それに無理矢理連れてこられた人質の和彦しかない。

しかし、人質といえども和彦が大人しくなどしている訳もなく。

和彦は大きく背伸びをした。

「あー、腹減った。おい、そこのチビデブ。なんか食えるもん作れ」「チ、チビデブって、俺のことか？」

チビデブが自分を指差す。

「当たり前だろ。それに、ガリノツポ。お前は飲み物持つて来い」
「・・・あのな。お前、人質なんだぞ？芸能人だからってデカイ面すんな」

さすがに腹に据えかねたノツポが抗議する。

なんなんだ、こいつ！？

テレビじゃもつと爽やかで愛想のいい二枚目なのに、これじゃタダのワガママ王子じゃねーか！

和彦は、知る人ぞ知る二重人格なのだが、もちろんノツポはそれを「知らない人」である。

「俺の言う通りにしないなら、サインなんか書いてやんねー」

「お、お前な・・・！」

「お？なんだよ？その銃で俺を撃つのか？やってみろ、やってみろ。彼女に振られたかったらな」

「・・・くっ！」

KAZUFANのかわいい彼女のことを思うと、ノツポも和彦に銃口を向けられない。

「あ・・・俺、料理なんかできねーんだけど・・・」

何故かチビが申し訳なさそうに和彦に言う。

「今時料理の一つもできないなんて、女にモテないぞ？」

「え？そーなのか？」

「そうそう。朝飯くらいは女のために作れるようになったけよな、チビデブ」

「は、はい！」

チビが最敬礼する。

「まあ、取り合えず今日は駅弁で勘弁しといてやるよ。持ってこい。あ、ちゃんと金は支払えよ？」

「はい！」

勢い良く食堂車を飛び出して行ったチビを見て、さすがにノツポはため息をついた。

「お前・・・どーゆー神経してるんだ？」

「芸能界つてのは、世知辛いモンなんだ。図々しくなけりゃ、やってけねーよ」

「・・・なるほど」

和彦の図々しさは、生まれつきなんじゃあ・・・
それはともかく。

ノツポは銃をズボンのベルトに押し込むと、和彦の横に座った。

「でも、芸能界じゃなくても、世間は世知辛いもんだぞ」
「そーなのか？」

「ああ。高校もロクに出てない俺やさっきの奴なんか、金も仕事もないし・・・」

ノツポが肩を落としながら言う。

和彦は、ノツポの調子に合わせた。

「ふーん。それで、こんなことやってるのか」

「ああ。でも、これだって、どうせ俺達の取り分なんか知れてる」

「へー。下っ端つてのは辛いな。俺も、稼いだ金のほとんどは事務所の狸・・・」

「じゃなかった、社長がかつさらって行きやがる。お前んともそうなのか？」

「そうさ。俺達の親分がこーゆー仕事を見つけてきて、俺達にあれこれ指示するんだ。」

で、稼ぎの9割は親分が持って行っちゃまう。

だから俺達の取り分なんてせいぜい百万がいいとこだぜ」

「そりゃ、酷いな。せめて子分達で半分は貰えよ」

ノツポは大袈裟に頭を振った。

「そんな！そんなこと、親分に言える訳ねーだろ！俺達2人で半分も貰えるかよ！」

「でも、実際に仕事してるのは、お前とチビデブの2人なんだろう？」

「ああ」

「で、その親分とやらは、どっかで高みの見物をしている？」

「いや、ちゃんと仕事はしてるさ。今も、運転手を見張ってる」

「見張ってるだけだろ。そんなの楽なもんだ」

「そうだけど・・・まあ、俺達は言われたことをやるしか能がねーんだ。」

2人で100万だから、俺の取り分は50万か？そんだけでもあるとなじじゃ、全然違うし」

和彦は、ノツポの右肩に軽く手を乗せた。

「いいか？世の中にや、春闘ってゆー賃上げ交渉があるんだ」

「シユントウ？」

「そうだ。上司に対して『俺達はこのだけ頑張ってるんだから給料あげる！』ってゆー交渉だ」

「へええ。でも、そんなの認められるのか？」

「認められなきゃ、ストライキを起こすんだ。ほら、海外なんかよくそれで飛行機や電車がストップするだろ？」

「ああ！そういうば、テレビでそーゆーの、聞いたことがある！」

「な？お前らも、親分に対して春闘やってみるよ。ちよつとは取り分が増えるかもしれねーぞ」

「春闘・・・そうか、なるほど・・・」

ノツポは目から鱗とばかりに驚いた様子。

調子に乗った和彦は、更に続ける。

「そうそう。理不尽な親分なんかにつき合ってる必要ねーよ。

どうだ？稼ぎの半分よこさなきゃ、ストライキやるぞって言うてみる」

「ストライキかあ。仕事をサボればいいんだな？」

「そうだ」

和彦がニヤリと笑う。

「サボって、乗客を逃がしちゃえばいい」

「そうか、乗客を・・・って、そんなこと、できるわけないだろ！」

突然ノツポが拳銃を手に立ち上がった。

和彦は心の中で舌打ちをする。

ちえつ。

乗客を逃がしちまったら、元になる稼ぎ自体がなくなるってことに気付いたか。

思ってたより馬鹿じゃねーな。

いや、じゅうぶん馬鹿だとは思うが、

ノッポの馬鹿さは和彦の予想を遥かに上回っていた。

「そんなことしたら、親分に殺される！」

「・・・」

「それに！走ってる新幹線からどうやって客を降ろすんだよ！」

「・・・」

「あー、危ない。危うくお前の口車に乗せられるところだった。

もういい！お前なんか、とっとと返品してやる！」

こうして、和彦はめでたく寿々菜たちの元へ返品されたのだった。

第7話 ようやく振り出しへ

「たくつ。ここでやっと、プロローグに追いつくのかよ。もう第7話だぞ。」

いつまでこんなくだんねー事件続くんだ。信じらんねー・・・」

「どうした、和彦？何ブツブツ言ってる？」

「別に」

「それに信じられないのは、お前だ」

武上は右手の拳銃・・・ではなく、箸を和彦に向けて言った。

「犯人に連行されたくせに、弁当付きで返品される人質がどこにいる」

「まあ、人徳ってやつだ。それより武上、人に箸向けんじゃねーよ。行儀悪いぞ」

「・・・」

「それに、そーゆーお前こそ、俺が貰ってきた弁当食いやがって」
「・・・」

武上はさすがに黙り込み、食べることに専念した。
腹が減っては戦はできぬ。

ノッポに見放された（？）和彦は、「転んでもタダでは起きない」
精神で、

チビが調達してきた弁当をちゃっかり4人分せしめて来たのだ。
寿々菜と山崎はもちろん武上も、周囲の目なんかなんのその、
ありがたく頂くことにした。

「そうだ、和彦。携帯の電源、切つとけ」

ようやくお腹が落ち着いた武上が言った。

「携帯？ちゃんとマナーモードにしてるぞ？」

もはやマナーモードなんぞクソ食らえ状態だが、
変なところで律儀な和彦である。

「違う。乗客の誰かが、車内から携帯かパソコンでこのジャックの
ことと、

人質の中にお前がいることをネットに流したらしい」

「・・・」

「多分、門野社長から『実況中継しろ！』とかゆー内容の電話が、」

武上が言い終らないうちに、和彦が携帯の電源を慌てて切った。

よくみると、既に門野社長から何度も電話がかかってきてるではないか！

ちなみに門野社長というのは、和彦と寿々菜が所属する門野プロダ
クションという芸能事務所の社長で、
儲け話に目がない男である。

この社長のせいだ、和彦は随分な目にあってきた。
どれほど「随分」かというと・・・

「おお、助かったぜ、武上」

和彦が武上に素直に礼を言うくらいである。

武上が周囲に聞こえないよう、声のトーンを落とした。

「さっき、三山さんと電話で話した」

「三山さん？ああ、お前の相方か。お前と違って人間のできた」

「一言多い」

「で、このジャックのことを連絡した？」

「いや、そうじゃない」

「え？」

「実は・・・」

武上はため息混じりに、三山との電話の内容を話し始めた。

「もしもし、三山さん？武上です」

「お、武上か。今、新幹線の中だな？」

「・・・どうしてわかるんですか？」

武上は嫌な予感がした。

「実はさっき本庁に、新幹線がジャックされて、

犯人から1億円と逃走用の車を2時間以内に東京駅に用意するよう
要求してきた、という連絡が入った」

「・・・」

「で、それとほぼ同時にインターネットで『ジャックされた新幹線
の中にKAZUがいる！』、
という情報が流れた」

「・・・」

「お前、和彦君たちと京都へ旅行に行ってるんだろ？」

「・・・」

やっぱり、和彦となんか旅行に行くんじゃないかった！！！！

武上は激しく後悔したが、後の祭りである。
それでも武上はなんとか気を取り直した。

「それで、犯人の要求は？」

「だから、2時間以内に東京駅に1億円と車を用意するように、だ」
「・・・それだけですか？」

「それだけだ」

だが言葉とは裏腹に、三山の声には疑問が含まれている。

「随分と雑な要求ですね」

「やっぱり、お前もそう思うか？」

「はい」

武上は眉を寄せた。

本気で1億円を奪って逃走するつもりがあるなら、嫌でも要求はもっと細くなるはずだ。

札は古くしろ、とか、通し番号じゃないものにしろ、とか、こんな入れ物に入れろ、とか。

それに、逃走用の車。

被害者にそんなものを用意させるなんて、

「GPSをつけてください」と言っているようなものだ。
それとも、実はそれはただのカモフラージュで、仲間の車が待機しているのだろうか。

そもそも、この事件はよくわからない。

何故わざわざ新幹線なんかジャックする必要があるのか。

確かに昨今、飛行機のセキュリティチェックは厳しいからハイジャックは難しい。

バスジャックも、逃走するのが難しいかもしれない。

でも、だからと言って、何故新幹線ジャックなんだ？

乗客数が多いから、人質全体に目を配るのも大変だし、行き先は限られてるし、

警察の目を盗んで逃走なんてできるだろうか？

金が欲しいなら、おとなしく(?) 銀行強盗でもしてろ！

と、結局和彦と同じことを考えている武上である。

「まあ、とにかく、乗客の中に刑事がいるってのは幸いだな」

「はい。でも俺、銃も何も持ってません」

「それはそうだな。でも、身体を張れば、乗客の1人くらいは助けられるだろう？」

「・・・三山さん、和彦に似てきましたね」

「そうか？」

だが、もちろんその「乗客の1人」が寿々菜なら、
武上は喜んで身体を張るつもりだ。

いや、俺は刑事だぞ。それが寿々菜さんじゃなくても、身体は張らねば！

・・・でも、寿々菜さんが和彦かって言われたら、そんなの悩むまでもなく・・・

武上がここまで考えたところで、当の和彦が弁当とともに返品されてきたので、

慌てて携帯を切ったのだった。

第8話 計算間違い？

「1億円！？ふざけんな！」

和彦は憤然として言った。

「なあ。ふざけてるだろ？」

「全くだ！人質の中に俺がいるのに、なんだそのしらけた金額は！」
「・・・」

「どうせなら派手に1兆円くらい要求しろってんだ！」

武上は呆れて物も言えなかったが、
寿々菜と山崎は珍しく意気投合し「ですよね」と頷く。

「・・・ん？ちょっと待て、1億円？1千万円じゃなくて？」

和彦がふと思いついたように、武上に訊ねる。

「間違いなく1億円だ。ちなみに1兆円でもない」

「1億・・・なんでだ？ただ単に、あいつがやっぱ馬鹿なだけか・・・？」
「？」

和彦は独り言のように呟き、腕を組んだ。

「どうしたんですか？」

寿々菜が和彦を覗き込む。

「いや、さっきあのノッポと話した時にさ。あいつ、儲けの9割く

「はいは親分が持つて行つちまつて、
自分らの取り分なんてせいぜい百万だつて言つてたんだ」

寿々菜は一生懸命計算した。

「ノツポさん達の取り分は儲けの1割で、それが百万円だから・・・
全体の儲けは1千万円、くらいですか？」

「そうなる。1億円じゃなくて1千万円だ」

「でも、和彦さん」

珍しく山崎が和彦に横槍を入れる。

「子分が大勢いたら、子分1人当たりの取り分は百万になるって意味かもしれませんよ？」

「いや、親分1人に子分2人の合計3人らしい。子分2人で百万だ」
「おい、和彦」

今度は武上が突っ込む。

「なんでそんなこと、知ってるんだ」

「だから、さっきのノツポから聞いたんだよ」

「そーゆー重要なことは、早く言え！」

「何だよ、自分もさっきまで弁当食つてたくせに」

「・・・」

和彦は大きく背伸びをして、そのまま手を頭の後ろで組んだ。

「はあ、一体1千万つて金額はどこから出てきたんだ？つーか、助かるなら、どーでもいいーけど」

「和彦、お前な。少しは探偵らしく解決しようとは思わないのか」

「俺、本物の探偵じゃないしー。アイドルだしー」
「・・・」

その通りである。

「それに、もう時間なさそうだぜ？」

「時間？」

「ああ」

和彦は新幹線の外を指差した。

「ほら、今、新横浜を通過した。もう間もなく東京でーす」
「・・・」

これまたその通りである。

「和彦さん、せっかくここまで解決したんですから、頑張って最後まで解決しましょうよ」

「あんな、寿々菜。ここまで、って全然解決してねーだろ。それに本当にもう時間がない」

そう言つて、和彦は車両前方の扉の上にある電光掲示板を見た。

通過した駅の名前が出たり、ニュースが流れたりするアレである。

こんな状況なので、もはや意味をなさないだろうが、

もしかしたら終点の東京駅まで後何分かが表示されるかもしれない、
と思ったのである。

つて、止まる予定だった新横も通過しちまったから、
あの電光掲示板の情報は本当に意味ねーか。

・・・つて、ん？

和彦は座席から身を起こし、
電光掲示板を見入った。

「・・・そうか、もしかして・・・」

「どうした？」

武上も、和彦につられて電光掲示板を見たが、
そこには今日の全国の天気の流れているだけだった。
しかし、和彦の目の輝きは普通ではない。

これは、そう。

何か閃いた時の目である。

「おい、武上。東京駅には警察も来てるんだろっな？」

「当たり前だ。私服警官も大勢いるはずだ」

「1億円と車の準備もできてるのか？」

「多分な」

「・・・ふーん」

和彦はニヤニヤしながら、座席に深く座り直した。

「なんだよ？何が言いたいんだ、和彦」

「手遅れだな」

「手遅れ？」

「ああ。だつて、」

その時、車内にアナウンスが再び鳴り響いた。

「乗客の皆様にご連絡致します。当列車は・・・ハイジャック犯によつて爆弾を仕掛けられました・・・」
停車後、5分以内に当列車は爆発します！」

第9話 停車

だから、「ハイジャック」じゃないだろ！

とは、さすがに誰も突っ込まなかった。

新幹線の中全体に緊張が走る。

「扉が開きましたら、どちら様も落ち着いて外に出て、急いで電車から離れてください。」

大丈夫です、5分あれば、乗客乗員全員が外に出られます。貴重品だけお持ちになり、大きなお荷物はそのままです……」

そこでアナウンスは唐突に切れた。

おそらくアナウンスの最後の方は、運転手の独断で言ったもので、犯人にマイクを切られてしまったのだろう。

一気に車内が騒がしくなり、乗客たちが我先にとデッキに向かう。しかし、せっかくの運転手の努力も虚しく、みんなしつかりと自分の荷物を全部持っている。

「運転手さん、大丈夫でしょうか？」

寿々菜が不安げに武上を見た。

武上も、同じ気持ちだったが、今ここで寿々菜にそんなことを言うても、

余計に寿々菜を不安にさせるだけだ。

「大丈夫ですよ。運転手に何かあれば、この新幹線は動きませんか

ら」

「そ、そうですね！」

寿々菜はホッとして、運転手に言われた通り財布と携帯だけ持ち、デッキへと続く長い行列の最後に武上たちと共に加わった。

しかしそのすぐ後ろに、小さな子供を2人連れた母親が並んだのを見ると、

寿々菜は自然とその後ろへ並び直した。

武上は微笑んで、そして和彦と山崎は肩をすくめ、寿々菜に続く。

だがその後ろにも、すぐに長い列ができていった。

行楽シーズンでも帰省シーズンでもないのにグリーン車にこんなに客がいる訳がない。

おそらく「グリーン車の扉の前の方がすいているだろう」と考え、流れてきた一般車両の客だ。

こうすれば、一般車両の扉の前も少しすく。

なかなか賢い客たちだ。

武上は、和彦の横で訊ねた。

「和彦。お前がさっき言ってたのって、」

「もう説明の必要ないと思うぞ。ほら、新幹線が止まる」

和彦の言う通り、新幹線の速度が落ちた。

武上は、チラッと列の前方を見た。

アタッシューケース男こと奥山の後姿が見える。

もちろん今はその両手は空だ。

まあ、怪我をしなかっただけでも幸いである。

その時、突然新幹線の速度がガクツと落ちた。

「うわ！」

「きゃあ！」

立っている乗客全員の身体が大きく揺れ、みんな思い思いに近くの座席にしがみつく。

しかし、堪えきれず転倒する者も少なくない。

鈍い寿々菜も危つくひっくり返りそうになったが・・・

「大丈夫か？」

「和彦さん・・・すみません」

こんな時なのに、和彦に腕を握られ寿々菜は頬を赤らめる。

いつもならば、こういう時に黙っている武上ではないのだが、今はそれどころではない。

「武上さん？」

山崎が、呆然とする武上に声をかける。

が、窓の外に姿を現し始めた長いプラットフォームを呆然と見つめる武上の耳に、その声は届かなかった。

「おいおい、気をつけてくれよ」

大きく揺れた運転室の中で苦笑しながらも、

「ボス」は銃の向きを変えない。

運転手は、自分を落ち着かせるために大きく息をついた。

「すみません・・・わざとじゃ・・・」

「わかってるさ。銃をつきつけられてりゃ、いつも通りの運転なんてできない。そうだろ？」

「は、はい」

なんてミスを。

乗客は大丈夫だっただろうか？

転んで怪我をしている人はいないだろうか？

失敗はしたものの、

運転手は少し落ち着きを取り戻していた。

もうすぐ停車するから、ということもあるが、
運転手には黒づくめ達の作戦が読めたのだ。

そして恐らくそれは、このままだと成功する。

なんとかして、外部と連絡を取り、

犯人達の考えていることを伝えたい！

しかし、ボスは運転手の考えなどお見通しだ。

「よし。俺はそろそろ行くからな。お前はちゃんとされた通り新

幹線を止めて扉を開け。

そしてお前もすぐにここから出て行け」

「はい」

「妙な真似をしたら、乗客を殺す。わかってるな？」

「・・・はい。あの、」

「なんだ？」

「あの・・・本当に爆弾を？」

ボスはニヤツとして言った。

「さあな。仕掛けてないと思うなら、お前はここに残れ」
「・・・」

そしてボスは運転室の鍵を開き、悠々と出て行った。

おとなしく、言われた通りにしよう。

運転手は心を決めた。

犯人の目的が何なのかはわからないが、
とにかく人の命が第一だ。

今度はいつも通りゆっくりと慎重にレバーを引く。

そして・・・ついに、新幹線は停車した。

第10話 パニック

扉が開くと同時に、新幹線から人の波が溢れた。

「新幹線に爆弾が！」という叫び声を聞き、ホームにいた人間も慌てて波に乗って改札へと向かう。

その勢いは凄まじかった。

寿々菜たちも、新幹線から出たというより押し出されて、ホームに降り立つ。

寿々菜と山崎はそのまますぐに走りだそうとしたが・・・足を止めて上を見上げる和彦と武上に気付き、立ち止まった。

「和彦さん？武上さん？どうしたんですか？」

武上は寿々菜の声には応えず、和彦の方を見た。

「・・・これは・・・」

「な？だから、手遅れだって言っただろ？」

武上は青くなつて頷き、再び目を上に向けた。

寿々菜もつられて、同じ方向を見る。

その視線の先には、駅の名前を示す看板が、ホームの屋根から吊るされていた。

「・・・え？」

いくら漢字が苦手な寿々菜でも読める。
そこに書かれた駅名は・・・

「品川！？東京じゃなくって!？」
「・・・こそ！」

武上は、急いで携帯を取り出した。
が、和彦がそれを制する。

「どーせ、ヘリが新幹線の上をずっとつけてたんだろ？新幹線が速度を落とした時点で、
東京駅じゃなく、品川駅に止まることはわかったはずだ。もう、本部にも連絡行ってるだろ」

「・・・」

「ま、それでも、ここに駆けつけるには間に合わないけどな」

武上は地団太を踏んだ。

くそっ！

東京駅に1億円を用意させたのは、
新幹線が東京駅に止まると思わせるための罠だったのか!!
本当の目的は1億円ではなく、他にあつたんだ！

雑な要求だと、思っていたのに・・・
くそ!!!

もちろん、品川駅にも、そして先ほど通過した新横浜駅にも、
万一を考えて警察は配備されている。

しかし、それは東京駅の比ではないし、何よりこの大騒ぎ。

混乱に乗じて、他の電車にひょいっと乗ってしまえば、簡単に行方をくらますことができる。

武上は、手を握り締めたまま、今まで自分が乗っていた新幹線の方を向いた。

そこからはまだ、大勢の人が押し合いへし合い、出てきている。

その時、武上は気付いた。

自分と同じようにホームに立ち止まり、新幹線の方を見ている男に、いや、身体は新幹線の方を向いているが、その視線は下に向けられている。

奥山である。

武上は、その異様な雰囲気になり、奥山に近づいた。

「おい、武上、どこいくんだ？爆弾は混乱を起こすための狂言だとは思っけど、

万一つてこともある。さつさと逃げた方がいいぞ」

「ああ。お前は寿々菜さんと山崎さんと一緒に、先に行け」

奥山は武上より新幹線に近い場所にいた。

つまり武上は、奥山の背中を目指し、人の波に逆らって歩くことになる。

自然、人とぶつかり合い、足の速度も遅くなる。

「武上さん！危ないですよ！一緒に逃げましょう！」

寿々菜が慌てて武上の後を追う。
しかし、騒ぎでその声は武上にまで届かない。

「おい！寿々菜！」

武上の後について行った寿々菜を、和彦も追う。

武上が奥山の所に辿り着いたとき、
その武上のすぐ後ろに寿々菜、そして更に後ろに和彦がいた。

「あの、すみません」

「！！なんですか！？」

突然後ろから肩を叩かれ、奥山が飛び上がる。

「もしかして、さっきのアタッシュケースを取りかえそう、と思っ
てますか？」

「・・・だったら、なんなんですか！？」

奥山が噛み付くように武上に言う。

「どれほど大事な物かは存じませんが、今はここを早く離れた方が
いいです。」

犯人達も、もう逃げてるかもしれせん」

「ほっといてください！」

奥山は再び視線を下に落とした。

「しかし、爆弾が」

「武上さん！！」

寿々菜が武上の腕にしがみつく。

「寿々菜さん!？」

「早く、逃げましょう!」

「何やってるんですか、先に・・・」

「いた!!」

え？

と、武上と寿々菜が思っ間もなく、奥山が突然駆け出した。

そして、ちょうど新幹線から出てきた、背の高い男にタツクルする。

「貴様!」

「うわ!なんだ、お前!」

タツクルされた男はふらついて、大きな鞆を地面に落とした。

「何すんだ!!」

「貴様!さっきの、黒づくめだな!？」

「・・・え?」

奥山の剣幕に背の高い男が動揺した。

「な、何、言って・・・そんな訳ねーだろ!何を証拠に!」

「靴だ!」

「え?」

「どうせ、変装して逃げるだろうとは思っていたが、靴は変えない

だろうと思っただんだ！」

「く、靴？」

背の高い男は、思わず自分の靴を見た。

白っぽい服装には似合わず、靴だけは真っ黒だ。

そう、さっきの黒づくめの男達がいっていたような黒い靴。

そして和彦は、その声にも聞き覚えがあった。

「おー。その声は間違いなくノツポだな？」

「あ！お前！」

「ほら、その『お前』って言い方。間違いない」

「・・・く！」

和彦が自信満々に頷くと、背の高い男・・・ノツポは、慌てて鞆を持ち上げ、一目散に走り出そうとした。

が、もちろん奥山も武上もそれを許さない。

必死でノツポの前に立ちはだかった。

「どけ！」

「そうは行くか！その鞆、置いていけ！」

「嫌だ！」

さすがに和彦も「知らない」とは言っただけで、武上と共に、ノツポの行く手をふさいだ。

「おい、ノツポ。全然見えねーだろうけど、こいつは刑事だ。諦める」

「け、刑事！？」

「そうそう。ここで逃げたら、公務執行妨害の罪までおまけでついてくるぞ」

「くそお！」

だが、もちろん、じゃあ諦めます、というはずがない。ノッポは鞆を握り締め、尚も抵抗をする。

その時。

「か、かずひこさあん・・・」

和彦と武上の後ろから、情けない声がした。嫌な予感がして、和彦と武上は、恐る恐る振り返る。

「寿々菜！」

「寿々菜さん！！」

「・・・ごめんなさい」

そこには、寿々菜とサングラスをかけた男が立っていた。

もちろん、仲良く手を繋いで立っていた訳ではない。

男は左腕で寿々菜を後ろから抱きしめ、右手の銃を寿々菜のこめかみに当てていた。

周りにはたくさんの人がいるが、誰も彼も逃げることに精一杯で、この危機的状況に気付いていない。

「道をあけてもらえるかな？」

サングラスの男は穏やかに言った。

第11話 大物小物

コイツが、稼ぎの9割を持って行っちまうってゆー「ボス」だな？

和彦は、心の中で舌打ちをした。

さすがに寿々菜を人質に取られては、和彦と武上は手も足も出せない。

それとは対照的にノッポは、助かったとばかりに、和彦の脇をすり抜け、ボスの方へ駆け寄った。

「すみません」

と、申し訳なさそうに頭を掻く。

「まあいい。ちょっとお荷物ができたが、連れて行こう」
「へえ」

ボスは「じゃあな」と言うと、寿々菜を左腕で抱きしめたまま、和彦たちに背を向け歩き出そうとした。

「おい！ちよつと待て！寿々菜は置いていけ！！」

「それは無理な相談だな。お前達がそこで大人しく突っ立ってりや、明日には返してやるよ。無事に、とは言わないが」

「ふざけんな！」

「寿々菜さん！」

「和彦さん、武上さあくん・・・」

寿々菜の涙声を聞き、武上の方が泣きたくなった。

ああ！寿々菜さん！

俺がついていながら・・・！！！！

しかし、やはりどうすることもできない。

和彦と武上は、ただただ小さくなっていく寿々菜を見つめた。

その時・・・誰も予期せぬことが起きた。

確かに、寿々菜は和彦と武上にとっては大事な存在で、
寿々菜を人質に取られている以上、手も足も出せない。

そう。和彦と武上は。

だが・・・

見知らぬ小娘なんか、どうでもいい！
とにかく設計図だ！

なんと奥山が、人混みにまぎれて立ち去ろうとするノツポに、後ろ
から飛び掛ったのだ！

「こいつ！設計図を返せ！！」

「ふわああ！」

不意をつかれたノツポは、情けない声を上げながらも慌てて奥山を

振り払う。

振り払われた奥山は、元々力仕事は苦手なのか、簡単に吹っ飛ばされ・・・

なんの偶然か、ノツポの隣にいるボスに、身体ごとぶつかった。

「きゃあ！」

「な、何をする！」

こちらも不意をつかれ、しかも片腕に小柄とは言え女子高生を1人抱えているのだ、
見事に寿々菜ごとひっくり返ってしまった。

が、さすがは「ボス」。

すぐに起き上がると体勢を整え、憎憎しげな表情で、
ホームに転がった奥山と寿々菜に銃口を向けた。

「よくも！！！」

「ひ、ひい！」

奥山は地面にへばりつき、身を小さくした。

そして寿々菜は・・・

転んだ拍子に奥山の下敷きになっていた。

つまり奥山は、地面にへばりついたのではなく、
正確には寿々菜にへばりつき、寿々菜を抱えるようにして身を縮めたのだ。

一瞬の出来事に、あっけに取られていた和彦と武上も、

ようやく我に返り、寿々菜目掛けて走り出す。

「寿々菜！」

「寿々菜さん！！」

でも・・・くそ！間に合わない！！！！

2人が同時にそう思った瞬間、

一発の銃声が、ホームに飛び交う悲鳴に掻き消された。

「遅いですな」

R社の社長・久保は、自社の応接室のソファに腰かけ、ため息をついた。

「申し訳ありません。もう間もなく到着すると思います」

久保の向かいでヘラヘラした愛想笑いをしながら座っているのは、奥山が勤めるB社の社長・小久保。

その名の通り、体格も風格も久保に比べて「小」久保である感是否めない。

奥山が極秘の設計図を届けるはずだった約束の時間から、すでに15分が過ぎていた。

いつもは寛大な久保も、さすがに少し苛々していたのだが、本来なら真っ青になっていてもおかしくない小久保は、何故か「もう少々お待ちを」と、余裕の態度。

久保が不審に思っていると、応接室の扉がノックされた。

「なんだ」

「失礼します」

振り向くと、秘書の女性が頬を少し紅潮させて入ってきた。

よし！やっとだ！

小久保は思わずニンマリした。

早く、今入った連絡を久保社長に伝える！

そうすれば・・・

ところが、小久保の予想に反した言葉が、秘書の口から発せられた。

「お約束のお客様がみえました」

「そうか！早くお通ししろ」

久保の顔に安堵の笑みが、
そして小久保の顔に引きつった笑みが浮かぶ。

来た、だと！？
そんな馬鹿な！

「あの、それが・・・」

何故か秘書の女性の視線が、久保社長と、後ろに控えているらしい
「客」の間を行き来する。

「どうした？早くしろ」
「は、はい。あの、」

秘書の女性が何か言いかけた時、後ろの「客」がそれを遮り、
応接室の中に強引に入ってきた。

久保はその「客」を見て首を傾げた。

はて、見たことのある男だな。

人の顔を覚えるのは得意で、一度会えば、忘れないのだが・・・

男は、およそこの応接室にふさわしくない雰囲気だった。
理由は、ジーパンという軽装にもあったが、
何より素人離れた美貌が、周囲を圧倒していた。

ただ、よほど大急ぎで走ってきたのか、髪は乱れ、息は上がっている。

そして久保社長を見て、息も絶え絶えに声を出した。

「あんたが、」

しかし男は言葉を切ると、一度息を飲み、それから深呼吸をした。ついでに髪に手櫛を通し、羽織っていたシャツの襟も正す。

そして次の瞬間には、この場の雰囲気になさわしいビジネスライクな笑顔に変わっていた。

「遅くなつて申し訳ありません。久保社長でいらつしゃいますね？」

「ああ」

「私は、B社の奥山の代理で、設計図を届けに来た者です。お約束の時間までにお届けできず、申し訳ありませんでした」

久保は、言い訳もせずガバツと頭を下げた男を見て、さっきまでの苛々がすつと晴れた。そして笑顔で言った。

「もういいですよ。とにかく無事、届けて頂いて助かりました。それで、設計図は？」

「はい、ここに」

男は久保の前のテーブルの脇にひざまずき、シルバーのアタッシユケースを開くと、

中の設計図をテーブルの上に並べた。

それを見て久保は頷いた。

「確かに、R社の社印が押されていますね。では、早速拝見させ・
」

「ちょっと待ってください！」

久保が設計図を手にしようとした時、
突然小久保が叫んだ。

「馬鹿な！それは偽物です！本物の設計図がここに届くはずがない
！」

第12話 偽物

「偽物？」

久保が眉をひそめる。

「でも、表紙に押されているこの社印は、確かにあたくの会社の物ですよ？」

それとも、この印鑑も偽物ですか？」

「そうです！」

設計図を見もせずに、小久保は大きく頷いた。

「どうして、偽物だとわかるんですか？」

「そ、それは・・・そうだ！さっき、私のところに連絡が入ったんです！」

「連絡？」

「はい！これを見てください！」

小久保は、応接室のリモコンを勝手に拝借するとテレビをつけた。どのチャンネルにも、リアルタイムらしい同じ映像が流れている。

「これは？」

「先ほど、ある新幹線がハイジャックされました」

だから、「ハイジャック」じゃ・・・

そんなことはお構いなしに、小久保は続ける。

「設計図を運んでいたうちの奥山という社員が、運悪くこの新幹線に乗っていて、

犯人に設計図を鞆ごと盗まれたらしいのです！」

「ほう」

「ですから、それがここにあるはずは・・・」

その時、テレビから、

「捕まった3人の犯人は、間もなく警察署に連行されます！」
というリポーターのけたたましい声が聞こえてきた。

「・・・え？捕まった・・・？」

小久保が1人で急に青くなる。

すると。

奥山の代理でやって来たという男が、ガラツと口調を変えて言った。

「そうだ。犯人は捕まったんだ。あんたの企みも、これでパーだな」

小久保はワナワナと震え、ドサツとソファに座った、
というより、崩れ落ちた。

「企み？なんですか、それは？」

「久保社長さん。B社は、期限までにR社から依頼された設計図を作ることができなかった。

でも、正直にそう言えば、もう二度とR社から仕事は回ってこない。
だから小久保は、『設計図はできたけど盗まれてしまった、ということにしよう』と企んだんです」

「なんですって？」

「この設計図、よく見てください」

久保は、男が指差した設計図の一枚を手に取り、じっとそれを見た。

「これは・・・滅茶苦茶ですね」

「やっぱりな」

男はため息をついた。

「ただ単に『盗まれた』と言っても、R社は信用してくれないかもしれない、

そう思った小久保は、新幹線ジャックという大きな事件をわざと起こして、

その間に本当に設計図を盗ませたんです」

「なるほど」

久保は頷いた。

「確かに、『アノ新幹線ジャックの犯人に持っていかれた』と言われるれば、

私も同情して『じゃあ期限を延ばすので、もう一度設計図を作ってください』と言うでしょう。

新幹線ジャックじゃ、盗まれたのはR社の責任ではないですから、また仕事も依頼するでしょうし」

「それが小久保の狙いです」

男は、小久保を睨んだ。

「新幹線なんかどうしてジャックするんだ、と思ってたんだ。

でも、新幹線じゃなきゃいけなかったんだな。奥山が乗っているあの新幹線じゃなきゃ。

んで、どーせ奥山は責任取らせて辞めさせるつもりだったんだろ？
仕事の期限は延ばせるは、不要な人材の整理はできるは、で、浮か
れてたんだろーけど、

あの黒づくめ達が今頃警察で全部吐いてるさ」

それから男は小久保に詰め寄り、胸倉を掴んで言った。

その口調からは、先ほどまでの人を小馬鹿にした雰囲気が消えてい
る。

「あんたのくだんねー企みのせいで、どんだけ大騒ぎになってると
思ってたんだ？」

しかも、銃で撃たれて怪我人まで出たんだぞ！」

「け、怪我人？」

「そうだ。奥山と、近くにいた女子高生が撃たれた」

「な！し、知らん！私はそんなことは指示し」

小久保の言葉は最後まで続かなかった。

なぜなら。

男のパンチが見事に小久保の顎に決まったからだ。

床に伸びた小久保を見て、久保がため息をつきながら首を振った。

「なんてことだ・・・その奥山さんと女子高生は大丈夫なんですか
？」

「まあ、なんとか。今、俺の知り合いが付き添って病院へ行ってい
ます。

その滅茶苦茶な設計図は、奥山が極秘の大切な物と信じて、身体を
張って取り返したんです。

血まみれになりながら俺に『これをR社に届けてください!』と言
ってましたよ」

「そうなんですか・・・」

男がテレビを見るとそこには、3人の犯人を警察の車に押し込んで
いる武上が映っていた。

あーあ。この映像は日本全国に流れてるのに、
あんな怒り狂った顔してたんじゃ、警察の評判もガタ落ちだな。

さっき自分も怒り狂って小久保をのしてしまったことなどコロツと
忘れ、

男は苦笑した。

その時、応接室の外がにわかに騒がしくなった。

「なんだ？」

気を取り直した久保がそう言って、応接室の扉を開くと・・・

「KAZUだ!」

「きゃあ!本物!?!」

「サインください!!!」

R社中の女子社員が秘書を先頭に、社長を押し退け応接室の中にな
だれ込んできたのであった・・・

第13話 波乱の幕引き

「んじゃ、小久保が黒づくめを雇った金額が1千万だったのか」
「そういうことだ」

いつものスーツ姿の武上と、
目深にキャップをかぶり、眼鏡をかけて変装している和彦は、
記者会見場の一番奥の壁にもたれながら、
たくさんのカメラとマイクに冷や汗をかいている寿々菜を眺めた。

芸能人のくせにカメラとマイクに怯えているようでは、
寿々菜が本物のスポットライトを浴びる日はまだまだ先のようにあ
る。

新幹線ジャック事件の翌日、
門野社長の案で早速記者会見が開かれた。

ただし、そこに出席するのは寿々菜と、和彦のマネージャーの山崎
だけ。
和彦は出ない。

「どうして和彦は出ないんだ？さぞかし注目を集めるだろうに」
「『KANZUが事件現場に居た』ってだけで、充分に注目集めてる
だろ。
俺がわざわざ記者会見に出るまでもない」

確かに、先ほどから寿々菜は、

「KAZUさんとはその時、どういうお話をしたんですか!？」とか、

「KAZUさんが、一時人質になっていたというのは本当ですか!？」とか、

「KAZUさんが、警察と一緒に犯人を取り押さえた時の状況を教えてください!」など、

KAZU関係の質問の集中砲火を浴びている。

「それに、記者会見なんかに出ても1円の稼ぎにもなんねーからな。門野社長が『スウと違って、お前がしゃべるとなるとマスコミはいくらでも金を出す。だから絶対に突然のインタビューなんかには答えるな!ギャラを多く出すマスコミ順に、お前の話を聞かせる!』だつてさ」

「・・・」

こんな時まで金稼ぎのことを第一に考えると、さすが芸能プロダクションの社長。

武上は頭が痛くなった。

「そーいや、奥山の怪我はどうなんだ?」

「ああ、たいしたことない。肩をかすつたくらいだ」

「じゃあ、もう退院すんのか?」

「明日にはな」

あの時ボスの撃った弾は、奥山の肩と寿々菜のこめかみをかすめた。奥山は、傷は浅かったもののかなり出血し、和彦に遺言(?)を残して気絶してしまった。

一方寿々菜は、弾が奥山の肩に当たり威力がそげたお陰で、本当に軽くかすった程度。

今も左目の脇に小さな絆創膏が貼られているくらいだ。

が、さすがに目の前で寿々菜に向かって発砲されたのだ。

その時は怪我の状態もはつきりしない。

和彦は寿々菜に駆け寄り、武上はボスに殴りかかった。

幸い、駆けつけた警察官によって、ボスもノツポも、そして少し離れたところにいたチビも、すぐに逮捕された。

そして、和彦はR社へ、武上は犯人達と一緒に警察へ、山崎は寿々菜と奥山に付き添って病院へ、行ったわけである。

もちろんすでに小久保も逮捕され、B社はテンヤワンヤしている。

「でも、奥山はこれからどうするんだろうな。

自分を捨て駒にしたB社に戻るのは辛いだろうし、B社にとっても奥山は腫れ物だ」

B社のことを思い出し、武上は暗い気持ちで呟いた。

「ああ、それなら大丈夫だ」

和彦が簡単に請合う。

「え？」

「R社の久保社長が、身体を張って仕事をやり通す、ってゆー奥山の愛社精神に打たれて、

奥山をB社からR社に引き抜いてくれるらしい」

「そうなのか？よかった。・・・でも、こう言っちゃなんだが奥山は、その、仕事があんまり・・・」

「武上も、なかなか酷いことをゆるいな」

「・・・あいな」

武上が和彦を睨む。

「ま、あのおっさんが仕事できないのは事実だ。久保社長はそれも承知で引き抜いてくれるんだ。

庶務課長のポストを用意するってさ」

全国の庶務課長が聞いたら気を悪くするだろう。

庶務課長だって、仕事ができる人間じゃなきゃ務まらない。

久保は奥山を育てるつもりで、敢えて背伸びしたポストを与えたのだ。

「あと、ちょっとしたオマケもつく」

「オマケ？」

「奥山を引き抜く代わりに、俺がR社のCMに無料で出てやることにした」

和彦が胸を張る。

が。

「ふーん」

「ふーん、て・・・。武上、もうちょっと驚けよ」

「お前がどこのCMにいくらで出ようと俺には関係ない」

ごもつともである。

だが、門野社長にとってはどうでもよくない！

門野社長はしかし、和彦の勝手な判断に激怒したものの、マネージャーの山崎がこれまた勝手にスケジュールを組んでしまったので、どうしようもない。ボランティアだと、諦めることにしたらしい。

が、後日、この「美談」が門野社長によって雑誌に売られることになろうとは、

和彦にも予想できなかった。

「CMの一つくらい無料で出るからって威張るな」

「・・・武上。俺のCM出演料、いくら知ってるか？」

「CM出演料？」

「依頼してきた企業が、俺の事務所に払う金額だ」

「うーん」

武上は、自分の給料と照らし合わせて考えてみた。

芸能人は金持ちだからな！。

100万円くらいか？

いや、なんでかKAZUは人気があるからな・・・

「500万円、くらい」

「アホ」

和彦が右手の人差し指を立てる。

「1千万!？」

「1億」

「い、い、1億!？」

和彦はニンマリと笑った。

「黒づくめ達、あんなちゃんけな仕事せずに、俺を誘拐でもすりゃ良かったのにな。」

あつと言う間に大金持ちだぞ」

「・・・」

「でも、その割りに、俺って給料もらってねーんだよなあ」

和彦は、口をあんぐり開いている武上をよそに、

寿々菜の後ろに立っている門野社長を見た。

飄々とした感じの男に見えるが、

頭の中では今頃電卓を叩いていることだろう。

あーあ。俺も春闘、やろっかなあ。

和彦は本気でそう考えた。

第13話 波乱の幕引き（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました。

この後、また第5弾の連載を行いたいと思います。

話数は大して多くないのですが、一話一話が長めなので、軽く長編になっておりますが・・・

お付き合い頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646m/>

アイドル探偵 4 「波乱の京都旅行」後編

2010年10月15日12時57分発行